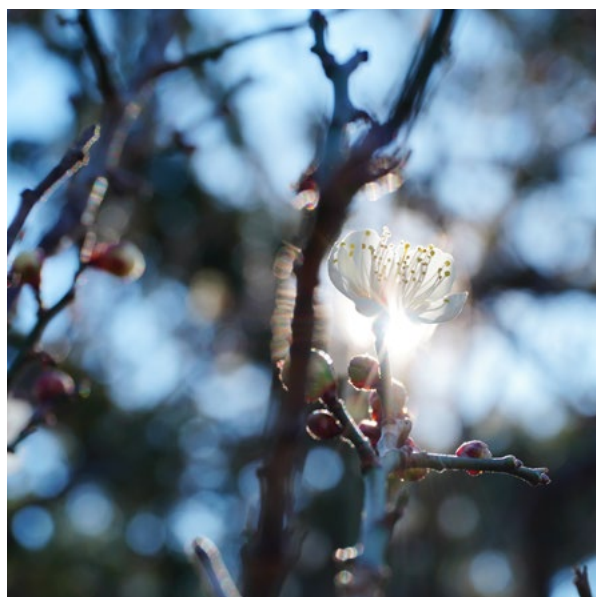
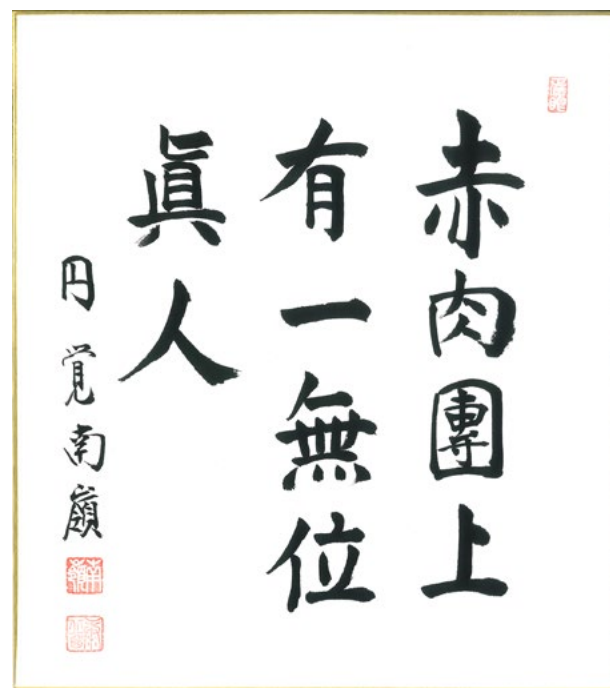


円覚

令和3年 春ひがん号

333号





円覚333号目次

管長猊下 色紙	表紙II
臨済の教えに学ぶ／横田 南嶺	1
信心ことはじめ ③②	10
みとりのころ(二)／鈴木 秀子	12
鈴木大拙の言葉と生涯(二)／蓮沼 直應	22
春の冷え／桜井 竜生	28

表紙・裏表紙写真／円覚寺派宗務本所

臨済の教えに学ぶ

管長 横田南嶺



三つの教え

令和三年は、新年早々一都三県の緊急事態宣言から始まりました。やがて収まってゆくのであろうと思いますが、影響が長く引くと不安な気持ちになりがちであります。そんな時にこそ、禅の教えを学ぶことあります。円覚寺は臨済宗でありますので、臨済禅師の教えをもとに建立されています。そこで宗祖臨済禅師の教えに学んでみたいと思います。

臨済禅師は西暦八六七年、今から千百五十四年前にお亡くなりになっていきます。五年前の平成二十八年に千百五十年忌の法要を勤めました。残念ながら生年がはっきりしていませんので、おいくつで亡くなったかは不明です。

臨済禅師の教えを学ぼうと思えば、その語録である『臨済録』を読むのが一番であります。ただ今は岩波文庫に現代語訳もごございます。現代語訳があるとはいえ、なかなか

かその内容を理解するのは容易ではありません。
せん。

ここでは、今わたくしたちが『臨済録』から、何を学ぶべきかを、次の三つの要点にまとめてみます。

一、無位の真人

—自己の素晴らしさに目覚める。

二、随处に主と作る

—どんなところでも主体性を持つ。

三、活潑潑地

—いきいきと生きる。

どんな時代になろうとも、どんな困難な状況になろうとも、常に自分自身の足元を見つめて、自己の素晴らしさに目覚めることが第一です。

お互いのこの身に地位や名誉や財産や学歴や男女などに汚されることのない本当の

自分がいます。自分が善いことをした時には、心の底から喜ぶし、逆に悪いことをした時には、真摯に反省します。周りの人々の言葉に惑わされず、心静かで確かな目を持って見ることでできる自分がいます。

自分を忘れて人々の幸福を心より願うような素晴らしい自分が本来具わっています。その素晴らしさに目覚めて、どんなところでも主体性を持って、いきいきと生きるというのが教えであります。活潑潑地というのは難しい言葉ですが、『広辞苑』には「気力にあふれ、きわめて勢いのよいこと」と説明されています。

自己の素晴らしさに目覚めた人

「無位の真人」というのが、臨済禅師のお説法として有名なのです。「あなた方の身に

何の位にも属さぬ真人がいる。それが顔から出入りしている。まだ確認しておらぬ者は、今こそ看とどけよ」と示されました。

目で物を見たり、耳で音を聞いたり、鼻で匂いを嗅いだり、舌で味わったり、身体に触れて感じたり、というこのはたらきこそが真人のはたらきだということです。

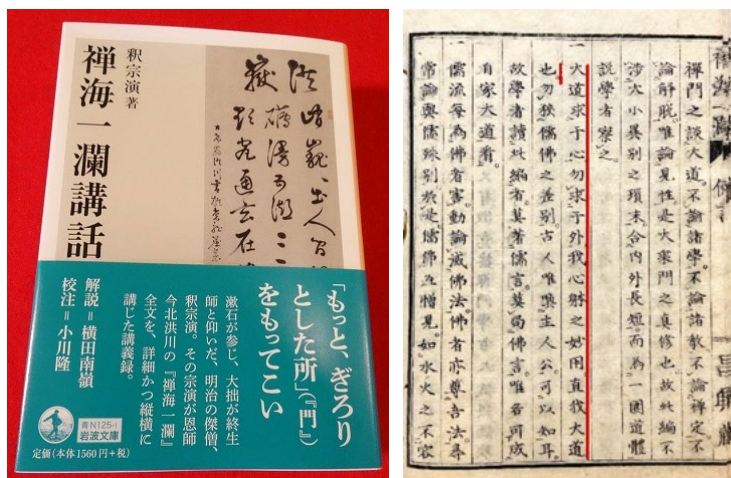
こんな臨済禅師の教えが、世の中に大きな影響を与えたことがありました。明治時代の話であります。今日では、男女とも平等の参政権があるというのは当たり前のようになっていますが、この実現には苦労がありました。そんな男女平等の女性解放運動に大きな力を発揮したのが、平塚らいてうという方です。らいてうについて『広辞苑』を見ますと、「女性運動家。本名、明。東京生れ。日本女子大卒。雑誌『青鞥』

創刊。「新しい女」という非難に抗して、婦人参政権運動に尽力。第二次大戦後も女性解放・反戦平和運動に活躍。自伝『元始、女性』は太陽であった』（1886～1971）」と書かれています。女性の参政権は戦後になってようやく認められたものでした。

その女性解放運動家として活躍した平塚らいてうが、若い頃に熱心に参禅して、『臨済録』から大きな影響を受けていたのであります。

らいてうが仏教に触れた縁というのは、たまたま訪ねた友人の部屋に置いてあった『禅海一瀾』という書物を読んだことでありました。

『禅海一瀾』は、円覚寺の管長であった今北洪川老師の著書であります。これは儒教と禅との一致を説いた書物であり、『大学』



〔左〕『禅海一瀾講話』2018年 岩波文庫にて再刊 〔右〕和綴じの木版刷りより

『論語』『中庸』などの儒書の言葉を用いて禅を説いています。原文はすべて漢文であります。平成三十年に洪川老師の弟子にあたる釈宗演老師の百年忌を迎えた際に、釈宗演老師がこの書を講じた『禅海一瀾講話』を記念に再刊しました。それでも難しいと言われることがあります、らいてうがこの時に手にした『禅海一瀾』は和綴じ木版刷りの漢文であります。

らいてうが、本を開いて目にした言葉は、「大道は心に求む、外に求むること勿れ、我が心体の妙用は、直に我が大道なり」という一文でした。もちろんのこと、本には漢文のまま「大道求于心、勿求于外、我心体之妙用、直我大道也」と書かれていたのです。

これを目にしたららいてうは、「『大道を外に求めてはいけない、心に求めよ』というこ

とばかり、觀念の世界の彷徨に息づまりそうになっている、現在の自分に対する直接の警告のことばではありませんか」と思ったといいます。そこで、「わたくしは息をのむ思いで、矢もたてもなくこの本を借りうけて帰りました」というのですから驚きであります。当時の女学生たちの教育水準の高さと、またそれと同時に、今北洪川老師の影響の大きさも改めて思います。

当時既に洪川老師はお亡くなりになった後であり、らいてうは釈宗演老師の弟子である釈宗活老師に参禅しています。かの夏目漱石が、釈宗演老師に参禅して与えられたのと同じ問題（公案）「父母未生以前本来の面目」に取り組んだのでした。まだ両親から生まれる前の本来の姿はどのようなものかという問題であります。日暮里にある両忘庵（りょうぼうあん）と

いう宗活老師の禅道場にらいてうは熱心に通って参禅していました。

ある日のこと、老師の提唱が始まる前に『坐禅和讃』を皆で読誦していて、「当所即ち蓮華国、この身即ち仏なり」と唱えて、「合掌していた手を膝の上に置こうとした途端に、急霰のように大粒の涙がはらはらと膝の上に落ちて、拭う暇もない」という体験をされました。本来の自己に目覚めたのです。

その時に宗活老師が講義をしていたのが、『臨済録』でありました。「『無位の真人、即ち本来の面目が、この肉体より常に出入す、看よ看よ』という老師の充実した声が、頭のとっぺんから軀の中をずっと電流のように通り抜けた感じとともに、その瞬間『わかった！』と思ったものです」とらいてうの著『平塚らいてう自伝 元始、女性は大陽で

あった』に書かれています。らいてう二十歳の頃であります。

男性だ女性だということで区別されたり、差別されたりすることのない、人間としての尊厳性に目覚めたのです。生まれはもとより、富や財産の有る無しで差別されることもないのです。誰しもがみんな平等の素晴らしい心を持って生まれている、この真理に気がついたのであります。

『青鞥』の創刊号には、お釈迦様が悟して、すべての人に仏性が具わっていると説かれたことも紹介されています。それは単に書物を読んで知ったというだけでなく、参禅という体験を経て、大きな確信になったのです。

このように、らいてうの人間は平等であるという思想は、仏教を学び禅に参じたこ

とから来ているのです。女性解放運動の原点に、『禅海一瀾』や『臨済録』が深く関わっているのです。

主体性を持つていきいきと

仏なるものを自己の外に求めてはいけないう、真理はどこか遠くにあると思って探し回っても無駄だと臨済禅師はくり返し語録の中で説いています。仏とは、今この目の前で話を聞いているあなた自身のことだと説き示されました。そして人にだまされるな、人のことばに振り回されるなど説かれています。

臨済禅師の教えとは、自分の外に仏を求めて、それにひれ伏すというのではなく、自分自身の尊さに目覚めるというものです。立とうと思ったら、すっと立ち上がる、坐



今北洪川老師

ろうと思ったら、すっと坐る、服を着たり、ご飯を食べたり、日常の営みのすべては仏の営みだと説かれたのです。人間に生まれて、生きていることの素晴らしいさを説かれたのです。そのことに目覚めて、外に求める心の止んだ人を「無事の人」と言います。「仏とは無事の人だ」と臨済禅師は説かれています。

そして更に、その尊さに目覚めて、どんな所でもどんな場合でも主体性を持つて、いきいきと生きることを説かれました。

お互いに人として生きるには、主体性が大切です。人間は、半紙一枚でも人から言われて持っているのと重たく感じます。ところが、たとえば好きな人の為なら、どんなに重い荷物でも喜んで持つてゆくのです。いやいや歩かされるのは苦痛です。しかし



円覚寺YouTubeチャンネル／令和3年1月の日曜説教「臨済の教え」

健康の為に自ら歩こうと思って歩くのは苦痛でも何でもありません。同じことをしていても違うのであります。臨済禅師は、「しおれていてはいけない、主体性を持つて」と説かれていきます。しょんぼりしてはせつかくの尊い命が生きていないのです。

世の中のことは、みな生住異滅をくり返します。生じては住まり、変化して滅するということのくり返しです。これを人間の身にあてはめると、「生老病死」の四つになります。「生」は生まれることに通じます。「住」という存続することが、人間においては、「老」なのであります。「異」という変化することが、人間においては「病」として現れます。「滅」はそのまま「死」にほかなりません。人はその中で、喜んだり悲しんだり嘆いたり一喜一憂をくり返しています。

風が吹いたとしても、風は気圧の高低差によって生じているだけのもので、やがて弱まって収まると知っていれば振り回されることはありません。そのように知っていれば、風が吹いていることに対して冷静に対応すればいいだけのことです。必要以上に振り回されることはないのです。むしろこの風を積極的に活用して何かしようとすることもできます。

喜びや怒りの感情も、それぞれ何らかの条件によって生じたものであり、それがしばらく住まり、やがて変化して消えるものに過ぎないのです。そのように知っておけば、冷静に対応できます。それらの感情に振り回されるのではなく、むしろ積極的に主体性を持って生かしてはたらかせることもできるのです。

この度の新型コロナウイルスにしても、「生住異滅」をたどるだけです。何らかの原因によって生じて、しばらく住まり、変化してやがて滅するのです。そのように冷静に知って、こちらが主体性を持って、対応してゆくだけだと思っています。

どんな状況でも、自己の素晴らしさに目覚め、自らが主体性を持ち、いきいきと生きるという『臨済録』の智慧に学んで、道を切り開いてゆきたいものであります。